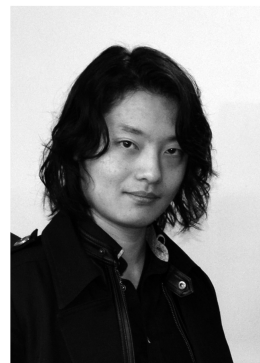


「分身ロボット OriHime が語るもの」



吉藤健太郎さん

(株式会社オリィ研究所代表取締役) に聞く

今号の特集のテーマは「ロボットを活用した教育実践と可能性」です。今回は、人間を孤独にしている要因である「移動」、「対話」、「役割」といった課題をテクノロジーで解決することを目指して、分身ロボット OriHime (オリヒメ) を開発されたオリィ研究所のロボットコミュニケーター、吉藤健太郎さん (通称オリィさん) にお話をうかがいました。

インタビュアー：CIEC 会誌編集長 横川博一 (神戸大学)
CIEC 会誌編集委員 村上正行 (大阪大学)

ロボット作りが目的ではない？!

横川 (編集長) 私たちの学会は、小学校から大学の教員まで、また教科も情報ばかりでなく国語や社会、英語などさまざまなんですが、ICT を教育にどんなふうに活用したらいいかを考えている人たちが集まっている学会です。さて、今年の1月にNHKで放映された番組も拝見させていただきましたが、その中でオリィさんが「ロボットを作ることが目的ではないんです」とおっしゃったのにはちょっと驚いたんです。なにかハッとさせられたんです。ロボットを作っておられる方だと思っていましたので。

吉藤さん (オリィさん) みなさんも教育のために教育をされているわけではないというのと同じだと思っています。たとえば会社を作るという人も、サービスの本質としてはそれが何のために必要なのか、誰の役に立つものなのか、ということが大事ですね。私も最初は車いすを作っていたのですが。

村上 (編集委員) そのお話に関連して、オリィさんが書かれた本やご講演・発表を聞かせていただいておりますけれども、「できることを増やす」ということを目的にされているんだなあと思っています。そういう意味でロボットを作るというのはいろいろできることを拡張するということだと思いますね。オリィさんが開発された OriHime などを使って、これからどんなことをできるよ

うにしたいと考えておられるのでしょうか。

オリィ 私は、教育というところでちょっと近いものを感じているところがあります。たとえば、ことばを話せないとか文字が書けないとかいう人たちに対して、教育というのは、その人の個人としての認知的な能力であったりスキルであったりとか記憶領域の技術を身につけていくというのがメインですね。その人がどう社会に入っていくのかという点が同じで、この OriHime というロボットによって、今までできなかったことができるようになっていけるように、その人が機能を拡張していけることが役割だと認識しています。

村上 私も何度かこの OriHime で喋らせていただいたことがあるんですが、首が小刻みに動いていますね。これは操作をしているのでしょうか？

オリィ はい、自動で動いているわけではなく、私が操作しています。

村上 なるほど。コミュニケーションにおけるあいづちやうなずきについてはいろんな研究があります。大きくうなずくのはある程度分かるんですけど、小刻みに動かしているのは自動的にしているのかなと感じまして。

オリィ あまり小刻みにうなづくようにするといかにも聞いてないように感じます。これもある程度オートメーション化してもいいんですが、たとえばこうやって左手を動かしたりとか (笑)、なにかしらのアピールみたいなものをするとか、こういうところにはコストを払いた

い欲求みたいなのって人間のコミュニケーションにはあるので、あえて自動化してないんです。

村上 なるほど。確かに、工学的な発想ではオートメーション化しようという話になりがちですが、おもしろいですね。

オリイ 昔は楽をすることが幸福だった時代だったかもしれませんが、今は楽することがいいかっていうと、人間はそれでも何かしたい生き物なんですよ。だから今、頑張りがすぎないようにとか、仕事しすぎないようにという方向に進みがちですけど、私はしたい仕事ができるということは、ひとつの権利であると思っています。頑張りたいことを頑張れることは“個人”の醍醐味だと思う。だから、ここは自動化してはいけないところだと思っていますね。



OriHime で越えられるもの

横川 OriHime の開発に、オリイさん自身に不登校の時期があったことがひとつのきっかけとなった、それが原動力になったということのようですね。そのときにも、それでも誰かとかかわりたい、誰かとコミュニケーションをとりたいと思われたのでしょうか。

オリイ そうです。なかなか難しいんですけども、人とまったくかわりを絶ってゲームをしたり本を読んだりしていたんですが、いい本に出会ったら、そのいい本の内容について誰かと語り合いたいからネットに潜ったり、折り紙の作品があれば、それを誰かに見せてプレゼントして喜んでもらいたかったり、やっぱり人のリアクションを求めたんですよ。そういうのはすごく感じていたし、まったく人のリアクションがない世界にいと生きてる気がしないというか、生きてることもそもそも辛いわけですよ。身体がしんどかったり、そのモチベーションを保てない、そういう気がしていましたね。

村上 ご著書の中でも「ありがとう」っていい過ぎると負債になるっていうのが、すごく印象的でした。3年ほ

ど前に、日本教育工学会で視覚障がい者に関する発表を早稲田大学大学院の森田さんが OriHime を使ってされていました。動けない人が OriHime を使って学会発表するというのは、とても重要なことだと思いました。私自身、フラットにコミュニケーションをすることの重要性っていうのを普段から意識すること多いんですけど、障がいや病気を抱えていて活動するのが難しかったりする人とのコミュニケーションのあり方、OriHime の活用法やその理念、思いなどをお聞かせください。

オリイ 本にも書いたのですが、人って誰かにお礼を言ってもらいたいというリアクションが欲しい生き物です。そういう部分を自分は何もできないと思っている、そして周りからも何もできないだろうと思われている状態から、そこを変えるというのが、福祉機器のひとつだと思っています。今忙しい人は忙しくなるし、暇な時はとことん暇になる社会なんですよ。"役割格差"があるなと思っていて、そこをインターネット技術やこういうツールを使って克服できるといいのかなと思っています。障がいという言葉がありますが、「障がい者」と「障がいのある人」というのはけっこう別なんです。障がい者かどうかっていうのは「障がい者手帳」を持っているか持っていないかというゼロイチかで表現するものでは本来ないはずですよ。「障がい者手帳」を持っていたとしても全然困っていない人もいますよね。

村上 グラデーションですもんね。

オリイ この間、乙武さんと講演したんですが、「乙武さんって、障がいないよね」って聞いたんですが、「うん、特に生活で困ってる事はないかなあ」って言っていましたね。

村上 障がい者って、ひとくくりにするという話ではないということですね。

オリイ そうです。要は困っている人がいるか、困っていることがないかどうかという違いだと思っています。私たちが困ったときには助けて欲しいし、困ってないときにはお互い様ということで困っている人を助けにいいし、という話ですね。障がいというのは自分がしたいことが定義されていて、その定義されたミッションに対してどうしても超えることができないハードルがある場合に、それを障がいと呼ぶわけですよ。だからその障がいを克服するっていうものが世の中に存在していないに過ぎなくて、たとえば目が悪かったら眼鏡をかければ障がい者じゃなくなるわけですよ。それと同じようなものを世の中にちゃんと作る、パリアフリーな平らな道があれば車椅子でも移動できるのと同じように。そうい

うような環境を作っていくということによって障がいではなくなる障がい者もいるよね、というふうに私は感じています。

村上 身体的な障壁を越えるために作っているっていうこともあると思いますが、その障壁を越えることによって、心的な障壁も越えるになっているのかなと思っています。

オリイ はい、実際にそういうことはあると思います。たとえば手の不自由な人が、何か困っていることがあるかという、これは右手が動けばいいのになあと困っているわけじゃなくて、右手というのは右手を動かすことが目的ではなくて、右手で何をするかが目的で、そこを他人に委ねなければいけないこととか、誰かにお願いし続けなければいけないということが辛いんですね。そこを上手く、たとえば冷蔵庫を開けてドリンクを誰かに持ってきてもらうだけであれば、目の前にドリンクが出てくる仕組みを作ったら解決するかもしれないし、自分の右手が動かなくても左手だけで料理ができるような料理機器ができれば、誰かにご飯を作ってあげることができるようになりますね。そういうことです。

横川 そういう意味では、オリイさんのアイデアとOriHimeの発想は、人生100年時代には重要な意味を持つてくるようにも思います。

オリイさん登場

[注：実はここまでの私たちとオリイさんがOriHimeを紹介してやりとりをしていました(笑)。]

オリイ 体調を崩して会社に来られないこともありますし、私は鞆は自分で持つから、かばん持ちじゃなくて、どちらかというと私が行けないうきに「社長持ち」をやって欲しいということで、このOriHimeを持って行ってもらいます。新しい働き方としていいと思ってるんですよ。いつか身体が動かなくなってしまうかもしれないから、そういうときには誰かにOriHimeを持って行ってもらってそこでやると。

あるとき、学生インターンが鞆持ちに来たいと言うんです。北海道での講演依頼を受けたとき、私はその日はどうしても無理だったので、代わりにこれを持って行かせたんです。そうするとその学生は、北海道旅行も楽しめて、本来なら私がやる名刺交換から何から何までその学生が代わりにやらなきゃいけないわけです。オリイ研究所でインターンやっております何々と申します、打合せどこにしましょうか、という感じのことも全部自分でやらないといけないから、向こうの人と仲良くなれるし、そのまま夜は美味しいものを食べさせてもらえて、

いいことづくめです。私にとってもいいし、彼にとってもいいと。

私自身が行けるときは行きたいけれども、時間や距離が障がいになることがあります。北海道の患者さんの会などに参加したいのだけれど、予定を2日確保できなかったり、先方も講演料をなんとか節約したいというような事情があることもあります。私はここで90分喋ればいい、そして学生さんは現地へ行って皆さん喜ばれるというようなことも、ひとつの働き方だと思っています。

村上 インターンなどで学生さんが来られているんですね。それぞれ何かやりたいと言って来られるんでしょうか。

オリイ それもありますし、いろいろやっています。エンタメ部門があったり、インターンシップなどでもこれを使ってイベントに参加したりコンサートに行ってみようとか、OriHimeを使っている障がいをもっている人もいっぱいいますからね。そういう人たちで寝たきりなんだけれども、たとえば松岡修造さんのテニスを一緒に体験してくるというのができると、「あっ、こんなこともできるんだ」となるんです。これも立派な研究成果になりますね。今までできないと思っていたスポーツ観戦がロボットでできるっていうのも、寝たきりの人たちからしても、前例を築いたということで、ある意味、研究に研究のメンバーの一員として参加して誰かの役に立てるのだということを感じることができる。たとえば、誰かにお願いして自分のためにコンビニでお弁当を買ってきてもらうというのは、これはもう自分のためではないんですが、このOriHimeを持って行ってもらってどこか行くとか、まだまだやったことないことがいっぱいあるから、そういう研究に参加すること自体が、患者さんにとっても自分がやったことが人類のある意味歴史を作った気になるみたいな、そういうことって、インターンの学生にせよ、巻き込む仲間たちにしても、すぐやり甲斐があることなんですよ。そういう意味では、私の周りでは世界初のことが頻繁に起こっているんです。

横川 なるほど。OriHimeがもっている意味がだいぶ分かってきました。たとえば野球を観戦するにしても、テレビで野球を観るのと、誰かに連れて行ってもらって、そこでライブで観るのは全然違うわけですよ。

オリイ そうですよ。明らかにテレビでみる試合と球場で観る試合は違いますね。選手の顔までは球場じゃ見えないから、テレビはテレビの良さがあるんですね。でも球場は球場で、たとえば家族と一緒に観に行くとかというよさがあったりしますよね。そういう部分はメディアを変えると楽しみ方っていくらでも変わってくるわ

けですよ。映画なんかも、たとえば一人で家で鑑賞してもいいし、一人で映画館に行ってもいいし、友人と行ってその後、語り合ったりするよさがあったりしますね。そういうだれかと一緒に何かをするというところに価値があると私は思っていて、この OriHime というのは、その点は今まで足りてなかった領域を埋めていると感じますね。

横川 たとえば、私が社長で一人ここにいて、他の社員5人は OriHime でみんな参加している。その場合にも、その5人はお互いコミュニケーションできるわけですよ。

オリイ できます！ 集団の中に一人の個として入っていくというコミュニケーションは凄くやりやすいんです。たとえば、私の顔がモニターに映っていて、うちの社員からすれば、吉藤がでかいモニターに映っていて、常にみんな職場にいるって最悪に仕事しにくいですよ（笑）。たぶん、用がなくなったらそろそろ切ってって言われると思うんですよ。おばあちゃんも家にいて、モニターに映ってたとしても、おばあちゃんがモニターに映っているのに、周りの人が漫画読んだり皿洗ったりするのはやりにくいと思うんですよ。そろそろお疲れ様でした、また話そうね、みたいな感じになって、お客さん扱いみたいになっちゃうんですよ。それって、そこは自分の居場所ではないから、居場所として自分が当たり前のように、そこにみんなと同じようにいていい、そういうコミュニケーションツールというものはなかったと思うんですね。

横川 ちょっと楽をして、さぼるために使うこともできるわけですね（笑）。

オリイ 人間どんなふうに生きていても寝てる人は寝てますし、頷いていても聞いてない人は聞いてないので、そこをそもそも証明することはできません。授業中なんかもスマホいくらでもいじれますもんね。

村上 そこにいることが、そのまま証明ではないということですね。

オリイ はい、それはもはや時代遅れな発想だと私は思っています。授業中にスマホいじったっていいじゃないですか。ミーティングの最中でも緊急なことがあるかもしれませんし、授業中に分からないことがあったら調べることもありますね。そこにいたかどうかじゃなくて、ちゃんと繋がってればいいと私は思っています。

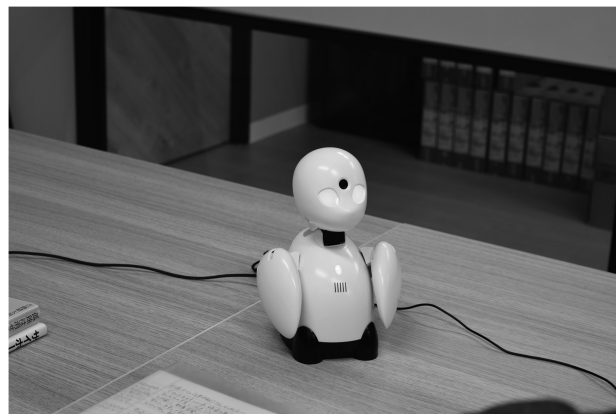
OriHime があぶりだす人間の価値

横川 じつはこの巻頭インタビューの号ではロボットと教育とのかかわりの特集します。私は漠然とロボットと

AI を同じようなものにとらえていたのですが、ご著書によると、OriHime は AI を搭載しているわけではないと知って、少々驚いたんですが。

オリイ ロボットや車椅子、そこに AI っていう言葉をもってくると私には違和感があるんですね。AI を作れる人間は価値があるかもしれないけれど、その AI というものが登場すると、自分がそこで役割を持っていたのにそこを奪われるみたいなことになってしまいますね。例えば「受付」をロボット化しましょうとなると人件費を削減しようという経営者の観点からそのロボットをあちこちに配置して、そこの役割を奪っていくわけですよ。そういうふうになってくると、ここで価値を感じられていた人が、それ以上の別の価値を探さなきゃいけなくなったり、たとえば 50 歳までこれが自分の武器だと思ってきた人が、AI の登場によってそこからもう一回別の自分の価値を再定義しなきゃいけなくなって、こりゃ大変だということになってくる。だから私は、AI だけというわけではなくて、そこはうまく自分の能力として取り込む、ここは人間という軸があって、その人は何がしたいかというものにしがたって、その人の能力の足りていない部分とか時代の変化によりギャップを埋めていくツールが福祉機器であって、それがテクノロジーであるという考え方をしています。

やっぱりその人の意思というものがとても大事で、その人間の意思を AI 化してはいけない、その意思にした



がってその人の能力を最大化するところをうまくやっていくのが AI ないし今のテクノロジーだと思います。これは私が「サイボーグ化」と呼んでいる概念です。

横川 AI と言えば、AI がヴァイオリンやピアノを弾いたり、絵画を描いてみたり、それは果たしてアートと呼べるのかといった議論もありますね。

オリイ あれは時代の変化という点でみると、変化量が

大きく、とてもおもしろいのでアートだなという気がしますね。多くの人の気持ちを揺さぶっていると思うんですよ。はじめは単におもしろがっていたものが、やがて、AIが作曲した曲に感動して、なぜAIはこんな曲を紡ぎ出したのだろうか、それはもしかすると人間には理解できない未知の感情というものがあって、それによって紡ぎ出されたところに人類の可能性が秘められているのではないか、そんなことをみんなが研究し始めたりすると、これはひとつのアート領域というか学会のひとつの領域として確立されるかもしれませんね。

ディープラーニングなんかもそうですね。結果は分かっているけど過程は分からないわけで、そこを研究するというのは研究として成り立ちますね。要は人間は何に感動するかということですよね。そこは自然界と同じで、未知の領域を研究する感動みたいなものが十分ありえると思います。

村上 工学者の間ではそういう観点はあまりないような印象ではあります。今オリィさんが言われたような話は、他のいろんな分野の人と、たとえば人文系の人たちやアート系の人たちと関わって解明していかないとけないところがありますね。

オリィ 今はAIブームでやっていることは、単純に作り上げていく過程が超楽しいわけですよ。街を歩いてグラフィックを楽しむことも喜びに感じるといったようなことも、その喜びを感じる移動という部分もオートメーション化しようと思えばできるわけで、その次には世界中の写真を撮ってくるようなシステムを開発しようとなつて、それまでできるようになったときに、果たして人間には何が残るんだろうということですよ。

村上 そうですね。

オリィ 人間の身体は残念ながら痛みもやっぱり感じるし、生きていて辛いこと苦しいことがいっぱいあるわけですよ。生きていて世界を居心地がいいと感じられないと生きていて辛いわけですよ。そうになってしまう方法しか私は正直興味がないんです。あらゆる医療などによって延命で生きていて、人生100年時代と言われて、日本だけが寿命がものすごく長い。でもそれは人工呼吸器とかを付けて、命として長生きすることを何よりも優先してきた国ですね。海外は、たとえば安楽死を認めていたりとか、呼吸器を付けるなんてとんでもないという世界もありますが、日本では、本人というよりも、社会的な価値、つまりちゃんと人が死なないように、差別がおこなわれないように、家族が悲しまないように、その人にちゃんと生きる権利があるっていうことを、当たり前のこととして一般化している国です。わたしたち

が身体が動かなくなってしまったとか、今の常識がぜんぜん通用しなくなってしまったときに、教育と同じように「人生論」、つまりロードマップが足りていないと思っています。そこを構築しなきゃいけないと。どうやって寝たきりになった後、自分らしく人生を死ぬ瞬間まで楽しむことができるかという、ここがどこの世界にも足りていなくて、だからここをやろうと思っているんです。

生きがい格差を乗り越えるマインド

横川 それがオリィさんの言う孤独の解消なんですね。
オリィ 日本は孤独でもいいから生きなさいという世の中のように思うんですね。長生きできて、かつ孤独にならないっていう方法がないと、この先人類にとってはまずいなと思います。QOL（Quality of Life）の話もそうです。それぞれの人にちゃんと役割があるかどうかという発想も孤独をどうやったら解消できるかっていうことを考えているのだと思います。ALSの患者さんや寝たきりの患者さんたちは誰かの役に立つことなどを諦めちゃっているんだけど、やっぱりそれはよくない。これから人類が高齢化していつて必ず直面する寝たきり社会のロールモデルを作ることがみなさんの役割なんですよ。みなさんは今辛いこともいっぱいあるし、痒いところに手が届かない生き方は凄く辛いけれども、そこは生きていて証になるからと、だからみなさん頑張っていきましょうと言いたいんです。ただ生きるのではなくて、そしてただの変な励ましでもなくて、一緒に研究していつて、前例を残しましょうということは今私たちはやっています。

村上 私も今、人工知能系の研究にも関わっているのですが、人工知能が発達することによって、人間が行う仕事の内容や、役割そのものが変わっていきますね。その中で、格差社会だとか役割格差などもすごく出てくるな、と感じています。

オリィ 生きがい格差とも言えるんですよね。

村上 そうですね。教育者として、そのあたりのことにどう対応していくかは課題です。学生さんがたとえば航空業界やホテルなどのいわゆるホスピタリティ系に就職したいと言っていますが、これから大変だなあと感じます。もちろん支援はするんですが、そういう仕事もいづれなくなるかもしれない。昔、人がやっていた切符切りの仕事が自動改札になってなくなったように、ずいぶん仕事の在り方も変わってきますから、便利になる反面、仕事というやり甲斐もどこに置くかわ変わってきますね。教育に携わるものとしては、どうしたらいいのか、課題

という悩みです。

オリイ 便利になることが豊かだった時代というのは、もはや昭和で、平成は便利イコール豊かではなかった時代で、次の時代は便利なのが不幸になることも十分ありえる時代だと思っています。

村上 まさに人生 100 年時代で、いろんな世代の人がいますから、そのマインドの差をどうするかは難しい問題ですね。

オリイ たとえば今の時代は 50 代の方が 50 代のコミュニティの中でヒエラルキーの上に立とうと思ったときにどんな人が強みになるかという、今の 10 代や 20 代の若者の変化量に合わせて自分も変化していくというマインドを持っている人だと思っています。だから若者に教えてもらうということはきわめて大事なことだと思うんです。今度 13 歳のインターンと対談するんですが、そういうことをするのは、彼らは私から教えてもらっていることもあるんですが、私も彼らから教わっていることも多いんですよ。今の子どもたちはネット上でいろいろやったり、Twitter でフォロワーがたくさんいてクラウドファンディングをやれば、13 歳の子どもでも 1,000 人集めたイベントを福岡でやったりできるんです。別の 13 歳の子は車椅子をたくさん買ってそれを自分と同じような車椅子の人たちに、車椅子を公費で買えない人たちに、安く車椅子をレンタルするような NPO を立ち上げたりしています。私たちが 13 歳の時にはできなかったことができるようになっていくという情報が聞けるのは、私にとってすごくありがたいことです。『サイボーグ時代』にも書きましたが、どんどん時代が変化する時代においては、若者の方が時代にマッチしているわけですから、若者から「教育をうける」という仕組みがとても大事だと思います。大人にはこんなふうに時代が変化しているということにちゃんと気づくことがとても大事でしょう。

村上 先日、社会人の学びなおしに関するシンポジウムが大学教育関係者向けにあって、社会人に大学院を受けてもらうということをこれから大学もやっていかないといけないという話題になりました。30 代や 40 代の社会人大学院生にいかん学んでもらうかということを考えるだけではなく、セカンドキャリアの人たち、リタイアした人たちに学んでもらうための環境作りというのも当然大事です。また、企業側にも、学が意欲や意識を持ってもらうこと、そういった人を支援する環境がとても大事になってきます。そういう場を提供する大学側も意欲をもって取り組んでいかないといけないですね。

オリイ 今、デジタルハリウッド大学大学院で特任教授

をやっているんですが、私より年上の生徒が多いんですね。今までの大学だと珍しかったんじゃないかな。吉藤がそこでやっているんだったら、その話を聞きたいという年上の人たちも集まってきているわけです。社会の中で年功序列社会がもはや崩壊しているということに気づいていない人、気づきたくないんだなあという人たちがいます。そこは崩壊させなきゃいけないと思う反面、逆年功序列社会で年下の方が威張っていてどんどん弱っていく社会というのも辛いと思いますから、まだまだノウハウや経験も必要だと思います。ノウハウをもっている年配の人と時代に合っている若者がうまくハイブリットに融合できるんじゃないかと思っています。だから老若男女の平等社会っていうのは、これからの時代のテーマだと思いますね。

オリイさんからのメッセージ

横川 この学会誌の主な読者はもちろん学会員、つまり大人なんですが、その向こうには小学生から大学生まで、いわゆる若者たちがいます。これからの世代を築いていく若者たちにメッセージをいただけないでしょうか。

オリイ 最近 Twitter などでも言っているんですが、人間が持って生まれた才能という部分って、なにかしらのツールがあればある程度の人ができるようになるかもしれないと思うんですね。そのとき、最後に残るその人の本当の才能って何かというと、何が好きで何が嫌いか、つまり、何に興味を持っていて何に興味を持っていないか、だと思います。学校で同じ教育を受けたとしても、英語が好きになる人もいれば工作が好きになる人もいるわけで、今までそれを全部ならしていくという「我慢の時代」だったんですけども、これからは、興味をどれだけ伸ばせるか、興味を大事にしてくれる環境にいかるかとか、もっと言えば、興味をどれだけ増やしてくれるかだと私は思っています。何が好きで何に興味があるかなんです。今までは、何になりたいか、夢を持ってだったんですよ。夢という言葉も平成前半あたりであやふやになってきて、夢を持ったところで、それもそもそも時代によって変わっていくわけですから、何になりたいかではなくて何がしたいかで人生を選んだ方がいいというのが今の時代には合っているというのが私の考えです。

事務局 今日お話を伺っていて、人間中心、っていうのがすごくいいなって思います。何をやるにしても人間らしくすることを大切にされているような感じがしています。

オリイ 私も生きていくというのが結構辛い生き物なの

で、未来が暗いと生きていくのが辛いですね。子どもを産まない方がいいとか、この子どもたちのこの先生生きていく時代が心配だとかという心配事が増えるとすればそれは不幸なことかもしれませんね。でもこの先がでなかったことがどんどんできるようになってきて、もっといい時代にもっていけるのであれば、次の世代にいいバトンを渡せると思っています。

そのあたりのことは意識しておく、生きることが辛い人たちも死なないための理由としては結構良かったりするんですよ。私も不登校を経験しているので、そんなことを考えています。普通に生きてるとあまり考えないのですが、何で生きているんだろうとか、どうして死なずに毎日頑張っているんだろうみたいなことを、寝たきりの人たちって呼吸器付けるか付けないか選べと言われるわけですよ。そのとき、多くの人たちは付けない方を選んでる。なぜ付けないかっていうと自分の周りが自分の介護のためだけに人生を棒にふるって、娘は結婚もせずに仕事にも行かずにずっと自分の中でおかりきりになっていて、そういうことを考えるわけです。しかし、自分が寝たきりになったとしても、視線とか脳波で多少でもいいから働くことができて労働力になって家にお金を入れられるとか、ヘルパーさんにお金を払って自分らしく生き続けられることができるのであれば、それは生きてもいいかもしれないと思うわけですよ。

こんな局面を私はたくさん見ていて、おそらくこれは人類がそのうち局面するものじゃないかと思っています。教育にせよ高齢者の生き方にせよ、そこが足りていないとすごく感じています。その足りていない部分をみんな今までは我慢しなさい、諦めなさい、仕方ないですよ、ということばで済ましてきたのですが、そこを何とかしないと孤独社会はいつまでたっても続くなっているのが私の見方です。

横川 最後に、教育についてオリィさんがお考えになっていることがありましたら、お聞かせいただけますでしょうか。

オリィ 残念ながら今の学校って、興味や関心や夢は何ですかとか夢を持ってという割には、その夢を持つための工夫を教えてくれないように思います。そういう夢を持っているんだったらこれをやりなさいと、わりと古い概念を押しつけて、結局のところ夢は叶わないっていうのが、今の学校の実状ではないかと思っています。小学校の1、2年生の間は、世の中にあるあらゆるもの、たとえば動画配信が流行っているからやってみようとか、そんなことをいろいろと体験させて、自分が好きなことや興味あることを見つけないということから始めてもいいんじゃないでしょうか。そこから先は、iPadを持ち込んだり、学校で友達と遊んだり、コミュニケーション能力を磨きつつ、それぞれが何かを使って情報を集めてきて何か作って発表し合うとか、従来の学校教育のやり方にこだわらず、単に知識を教えるんじゃなく、多様性に対応できる環境を整えるのがわたしたちの仕事じゃないでしょうか。

横川・村上・事務局 今日は、元気がなかなか出なかった人が、これだけ元気が出るんだというお話がいっぱい聞けたように思います。今日はお忙しい中、お時間を割いてくださり、ありがとうございました。

